

## 看護大学生に対する清潔間欠自己導尿指導の シミュレーション演習の評価

古川 智恵, 森 京子

### 抄 録

本研究の目的は、看護大学生の学びのレポートから清潔間欠自己導尿指導のシミュレーション演習の評価を行うことである。研究への同意が得られた81名の学生の演習終了後のレポートを分析対象とした。その結果、【正しい手順を理解するために患者の状況を見ながら根拠を踏まえたわかりやすい指導を行う必要性】、【看護師の温かく見守る態度やよき相談者として信頼関係を築く関わり】など6カテゴリーが形成された。演習を通して学生は、患者または看護師の立場に立って排尿障害のため清潔間欠自己導尿を行いながら生活する患者の指導方法や苦痛について学んでおり、清潔間欠自己導尿指導のシミュレーション演習は、看護大学生にとって患者理解を学ぶ効果的な演習方法の一つであると言える。

キーワード：清潔間欠自己導尿指導，シミュレーション演習，看護大学生，学び

### I. 緒言・目的

本邦において過活動膀胱の患者は810万人いると推定され、70歳以上では3割以上が過活動膀胱のため日常生活に支障があると報告されている<sup>1)</sup>。しかし、実際に治療を受けている人は70～80万人と推測され、実数よりはるかに少なく、多くの人が誰にも相談できず諦めたり、我慢したりして悩んでいるという状況である<sup>2-3)</sup>。このような状況に対して、平成28年度に、看護師による排尿自立指導料<sup>4)</sup>が算定できるようになり、多くの施設で泌尿器科医と皮膚排泄ケア認定看護師を中心に、排尿障害のある患者への治療・ケアが積極的に行われるようになってきた。本学では、排尿障害のある患者への技術演習を通して、排尿障害を患者の視点で捉え、排尿障害とともに生きる人の苦痛を理解すること、演習を通して得た学びを3年次後期の臨地実習に反映できることを狙いとしてシミュレーション演習を行っている。

清潔間欠自己導尿（以下、CIC）に関する報告は、高齢者自己導尿患者の認知機能に関する研究<sup>5)</sup>や神経因性膀胱患者のCICによるQOL<sup>6)</sup>に関する報告はあるが、看護大学生がCICに関する演習を通してどのような学びを得たかという報告はこれまで見られない。また、看護大学生を対象としたシミュレーション演習に関する報告では、手術直後の観察<sup>7)</sup>や自己血糖測定<sup>8)</sup>、インスリン自己注射<sup>9)</sup>などの報告は見られるがCICに関する報告

は見られない。

そこで、本研究では、2年次前期に開講している成人慢性期援助論IにおけるCICのシミュレーション演習を通して学生がどのような学びを得たのかを明らかにし、シミュレーション演習が学生にとって効果的な演習であったかを検討することを目的とした。

### II. 研究方法

#### 1. 研究デザイン

因子探索型質的帰納学的研究

#### 2. 清潔間欠自己導尿指導シミュレーション演習の概要

演習目的は、排尿障害のためCICが必要な患者への看護援助について理解を深める、CICをしながら生活する人がセルフマネジメント能力を高めるための方法について理解を深める、である。演習目標は、①排尿障害のある患者に対してCICの必要性を説明できる②DVD視聴と教員によるデモンストレーションに基づいてCICをイメージし、シミュレーションを実施することができる③排尿障害のある患者がセルフマネジメント能力を獲得するための具体的方法を説明できる④排尿障害のある患者の苦痛を説明できる、とした。

演習前に、腰椎損傷のためS2～S4が障害され、尿意がなく残尿が50～150mlの排尿機能障害がある20歳の大学生への看護について講義した。事例の性別は、演習参加学生と同姓とした。演習では、自己導尿カテーテル

Chie Furukawa, Kyoko Mori

四日市看護医療大学 看護学部

スピーディカテネラトン使用方法（男性向け、女性向け、コロプラスト株式会社作成）のDVDを視聴した後、Wound Ostomy Continence 看護師でCIC指導経験が豊富な教員によるデモンストレーションを見学した。教員は、学生がCICを実際にシミュレーションできるよう、スピーディカテネラトン男性用、女性用（コロプラスト株式会社）を各1本と清浄綿を準備し、自己導尿マニュアル<sup>10)</sup>を参考に、指導の手順について準備から片づけまでを説明した。その後、学生は5～6人のグループに分かれて、トイレで実施することをイメージして演習を行った。教員は、学生からの質問に対応するとともに、適宜、手技や説明方法の指導を行った。演習後、学生は事後課題として「演習を通しての気づき・学び」を（A5 1枚程度）に自由記載でまとめた。

### 3. 研究対象者

平成28年度成人慢性期援助論 I の履修者111名のうち、研究参加への同意が得られた学生とした。

### 4. データ収集方法

成人慢性期援助論 I におけるCICシミュレーション演習後課題（自由記載）を調査対象とした。

### 5. 用語の定義

学び：清潔間欠自己導尿のシミュレーション演習を通して学生が得た知識、技術だけでなく、気づきや理解を含む。

シミュレーション演習：模擬患者を想定して実際の清潔間欠自己導尿指導を体験する演習。

### 6. データ分析方法

データ分析は、成人慢性期援助論 I におけるCIC指導シミュレーション演習後課題の記述内容をデータとし、Berelson B<sup>11)</sup>の内容分析の手法に基づいて行った。文脈単位は、学生の演習後課題の学びに関する記述内容全体とし、記録単位は、「学生は成人慢性期援助論 I におけるCIC指導シミュレーション演習を通してどのような学びを得たのか」という研究のための問いに対する答えを一つ含むセンテンスとした。個々の記録単位の意味内容の類似性に従い分類し、同一記録単位群々を「研究のための問い」に照らしながら丁寧に見て、意味内容の類似性に基づき分析を繰り返してカテゴリー化し、命名した。カテゴリーの信頼性の確保のため、データを何度も繰り返し読みながら分析を行った。また、カテゴリー

分類の一致率をスコットの式<sup>12)</sup>に基づき算出し、研究者2名間で一致率が70%以上になるまで繰り返し検討した。

### 7. 倫理的配慮

研究協力依頼書を用いて、研究の趣旨、内容、プライバシーの保護と拒否する権利およびその際の保証について説明を行った。また研究に同意しない場合でも不利益がないことについて書面にて説明を行った。なお、本研究は四日市看護医療大学研究倫理委員会の承認（第113号）を得たうえで実施した。

### III. 研究結果

履修者111名のうち81名（73.0%）から同意を得た。81名の記述から315の記録単位が抽出された。このうち抽象度の高いものや主語と述語が一致していないなど意味不明な記述30記録単位を除外し、285記録単位を分析した。その結果、CICの演習における学生の学びとして49のサブカテゴリーから最終的に6カテゴリーが形成された（表1）。以下、【 】はカテゴリー、〈 〉は同一記録単位群、[ ]はカテゴリーを形成した記録単位数と全記録単位285に対する割合を示した。

【I 正しい手順を理解するために患者の状況を見ながら根拠を踏まえたわかりやすい指導を行う必要性】[122記録単位：42.8%]

このカテゴリーは、〈理解を促すために段階に応じて指導方法を工夫することの大切さ〉など10の同一記録単位群から構成されていた。

【II 看護師の温かく見守る態度やよき相談者として信頼関係を築く関わり】[51記録単位：17.9%]

このカテゴリーは、〈何でも相談できる信頼関係を築くことの大切さ〉など12の同一記録単位から構成されていた。

【III 羞恥心のため周囲の人に気づかれたくないという思いに配慮した気配りと環境調整の必要性】[42記録単位：14.8%]

このカテゴリーは、〈周囲の目を気にせず指導を受けられる個室を準備することの必要性〉など9の同一記録単位から構成されていた。

【IV 不安や緊張を軽減する声かけを行うことの大切さ】[32記録単位：11.2%]

このカテゴリーは、〈患者の表情を見ながら声かけを行うことの大切さ〉など8の同一記録単位から構成されていた。

表1 看護大学生の間欠的自己導尿指導シミュレーション演習における学び

n=285

カテゴリー	同一記録単位群	記録単位数(%)
I 正しい手順を理解するために患者の状況を見ながら根拠を踏まえたわかりやすい指導を行う必要性 122 (42.8)	1. 理解を促すために段階に応じて指導方法を工夫することの大切さ	19 (6.4)
	2. 理解の状況に合わせてわかりやすい言葉で指導することの必要性	17 (6.0)
	3. 正しい手順を理解するために根拠を踏まえて指導することの大切さ	17 (6.0)
	4. 理解を促すために模型などの視覚教材を活用し指導することの必要性	17 (6.0)
	5. 露出を最小限にしたケア技術の指導の必要性	12 (4.3)
	6. 正しい手技が理解できるようにコツや注意点を踏まえて指導することの必要性	9 (3.2)
	7. 感染を予防するための正しい手順の指導の必要性	9 (3.2)
	8. 痛みを軽減するための技術を丁寧に説明することの必要性	8 (2.8)
	9. 初めての経験でも技術が習得できる分りやすい説明の必要性	8 (2.8)
	10. 感染を予防するため根拠を踏まえて指導することの大切さ	6 (2.1)
II 看護師の温かく見守る態度やよき相談者として信頼関係を築く関わり 51 (17.9)	11. 何でも相談できる信頼関係を築くこと大切さ	9 (3.2)
	12. 恥ずかしさを感じさせない堂々とした看護師の態度	8 (2.8)
	13. 気軽に質問できる環境を整えること大切さ	7 (2.5)
	14. 困った時に迅速に対応する安心感のある関わり大切さ	6 (2.1)
	15. 自己にて実施できるようになるまで温かく見守る関わり	5 (1.8)
	16. やる気を損なわせない言葉の選択と説明方法の重要性	5 (1.8)
	17. 何でも相談しやすい同性の看護師による指導の必要性	3 (1.0)
	18. 話しやすい雰囲気をつくるための個室の準備	2 (0.7)
	19. 相談しやすいよう同年代の看護師がケアに加わること大切さ	2 (0.7)
	20. 自尊心を傷つけない関わり大切さ	2 (0.7)
	21. ケアを受け入れるよう一緒に悩み考えること大切さ	1 (0.3)
	22. 何でも相談できる信頼関係を築くため同じ看護師が関わること大切さ	1 (0.3)
III 羞恥心のため周囲の人に気づかれたくないという思いに配慮した気配りと環境調整の必要性 42 (14.8)	23. 周囲の目を気にせず指導を受けられる個室を準備すること大切さ	16 (5.8)
	24. 羞恥心に配慮して同性の看護師が指導すること大切さ	6 (2.1)
	25. 羞恥心に配慮した言動や行動大切さ	5 (1.8)
	26. 羞恥心を増強させない言葉の選択と看護師の態度	4 (1.4)
	27. 羞恥心を軽減するためモデル人形の活用による練習の必要性	3 (1.0)
	28. 周囲の人に知られたくないという患者の思いに寄り添ったケアの必要性	3 (1.0)
	29. 周囲に知られたくないという患者の気持ちに沿って個室を準備すること大切さ	2 (0.7)
	30. 羞恥心に配慮した指導方法の工夫	2 (0.7)
	31. においに対する配慮としてマスクを装着すること大切さ	1 (0.3)
	IV 不安や緊張を軽減する声かけを行うこと大切さ 32 (11.2)	32. 患者の表情を見ながら声かけを行うこと大切さ
33. 緊張感を軽減するリラックス方法の指導の必要性		5 (1.8)
34. 自信を持てるよう褒めて指導すること大切さ		5 (1.8)
35. 若さゆえの不安を和らげる優しく丁寧な指導の必要性		5 (1.8)
36. 必要に合わせて声かけを行うことでコミュニケーションをとりやすい雰囲気をつくる必要性		3 (1.0)
37. 自立への意欲を高める声かけと関わり大切さ		3 (1.0)
38. やる気を引き出す看護師の態度や声かけの必要性		3 (1.0)
39. 安心感を与える声かけの必要性		2 (0.7)
V 社会復帰後も安心してケアが継続できるための援助 26 (9.1)	40. 社会復帰を見据えた具体的な指導の必要性	10 (3.7)
	41. 社会復帰を見据えて予測される疑問には入院中に対処しておくこと大切さ	6 (2.1)
	42. 同病者の情報を提供することで同じ悩みを持つ人がいる安心感を与える援助	5 (1.8)
	43. 症状を悪化させないための排尿日誌の活用	1 (0.3)
	44. 感染を起こさないための手洗いの説明の必要性	1 (0.3)
	45. 自己導尿に頼らない骨盤底筋訓練の継続の必要性	1 (0.3)
	46. 退院後の相談窓口を明確にしておくこと大切さ	1 (0.3)
	47. 社会復帰への不安を軽減する看護師の関わり	1 (0.3)
VI よき相談者としての役割を果たすための家族への関わり 12 (4.2)	48. よき相談者としての役割を果たすための家族指導の必要性	8 (2.8)
	49. 家族の不安軽減への関わり	4 (1.4)

【V 社会復帰後も安心してケアが継続できるための援助】  
[26記録単位：9.1%]

このカテゴリーは、＜社会復帰を見据えた具体的な指導の必要性＞など8の同一記録単位から構成されていた。

【VI よき相談者としての役割を果たすための家族への関わり】 [12記録単位：4.2%]

このカテゴリーは、＜よき相談者としての役割を果たすための家族指導の必要性＞など2つの同一記録単位から構成されていた。

#### IV. 考察

##### 1. 清潔間欠自己導尿のシミュレーション演習における学生の学び

本シミュレーション演習では、4つの演習目標を挙げた。以下目標に沿って考察する。

###### 1) 排尿障害のある患者に対してCICの必要性を説明できるについて

玉井<sup>13)</sup>は、看護におけるシミュレーション教育は、何を教えるかではなく何を学ぶかという視点で、学習目標・目的を明確に示すことが学習効果を高めると述べており、本研究でも、学生は、演習目的・目標を理解したうえで、排尿障害のある患者の看護について講義を受け、CIC指導のシミュレーション演習に参加している。そのうえで、【社会復帰後も安心してケアが継続できるための援助】や【よき相談者としての役割を果たすための家族への関わり】を学ぶことができていた。このことから、看護大学生に講義と演習を組み合わせた授業展開は効果的であったと考えられる。

###### 2) DVD視聴と教員によるデモンストレーションに基づいてCICをイメージし、シミュレーションを実施することができるについて

学生は講義内容を確認しながら、DVDの視聴および教員によるデモンストレーションを見学したうえで、手順を見直し、【羞恥心のため周囲の人に気づかれたくないという思いに配慮した気配りと環境調整の必要性】を学んでいた。高比良<sup>14)</sup>は、紙面事例とシミュレーターを組み合わせた演習により、学生は視覚的イメージ化により理解が促進されると述べている。本研究では、さらに患者を同年代に設定したことで、自分が患者ならどうして欲しいかを踏まえて考えることができており、患者指導の場をイメージしやすかったのではないかと考える。

###### 3) 排尿障害のある患者がセルフマネジメント能力を獲得するための具体的方法を説明できるについて

学生は、今回の演習を通して【正しい手順を理解するために患者の状況を見ながら根拠を踏まえたわかりやすい指導を行う必要性】を学んでいた。池西<sup>15)</sup>は、看護基礎教育における看護実践能力の育成のための効果的な教育方法として、いかにリアルな事例や看護場面を導入し、考える授業を行うことができるかは、思考力の育成に大きな影響を与えると述べている。本研究でも、CICの道具を使用して実際のケアを想定することで、同年代の患者にCICの指導を行う時にどのような配慮が必要か、自分を患者に置き換えて考えることで、羞恥心への配慮や相手を思いやった声かけの必要性を学んでいた。

###### 4) 排尿障害のある患者の苦痛を説明できるについて

学生は、今回の演習を通して、【看護師の温かく見守る態度やよき相談者として信頼関係を築く関わり】や【不安や緊張を軽減する声かけを行うことの大切さ】を学んでいた。学生は演習を通して、排尿障害のある患者が、不安や苦痛を抱えながら生活していることを知り、排尿障害のある患者の大変さを知ることで、正しい知識を身につけ、指導方法を工夫する必要性を学ぶことができていた。

以上のことより、排尿障害がありCICを行う患者をイメージしたシミュレーション演習は、臨地実習前の看護大学生にとって、患者の理解を促し、看護師や患者、家族の立場に立って学習する効果的な方法であることが示唆された。

##### 2. 研究の限界と今後の課題

本研究の結果は、CICのシミュレーション演習の自由記載のみを分析したものであり、学生の学びが全て反映されているとは限らない。今後は、学生の学習がより深まるよう、演習方法を工夫し、排尿障害のある患者やCICを行いながら生活する患者をイメージして演習に参加し、臨地実習へとつながる授業設計ができるよう検討を重ねていく必要がある。

#### V. 結論

本研究では、臨地実習前の看護大学生に、排尿障害のためCICが必要な患者への看護援助を学ぶ目的でシミュレーション演習を行った。その結果、【正しい手順を理解するために患者の状況を見ながら根拠を踏まえたわかりやすい指導を行う必要性】、【看護師の温かく見守る態

度やよき相談者として信頼関係を築く関わり】、【羞恥心のため周囲の人に気づかれたくないという思いに配慮した気配りと環境調整の必要性】、【不安や緊張を軽減する声かけを行うことの大切さ】、【社会復帰後も安心してケアが継続できるための援助】、および【よき相談者としての役割を果たすための家族への関わり】の6つのカテゴリーが抽出された。学生は、看護師や患者、家族の立場に立って学習できており、患者理解を深める教授方法としてシミュレーション演習は効果があることが示唆された。

## 文献

1. 西尾俊治：平成28年診療報酬改定からみたこれからの経営戦略 在宅復帰には排尿機能回復のための治療とケアを「排尿自立指導料」について、日本慢性期医療協会誌，24（3），32-37，2016.
2. 福井准之助：高齢期のいわゆる心因性について考える 高齢期のいわゆる心因性泌尿器症状（排尿困難や尿閉・頻尿），老年精神医学雑誌，27（10），1058-1064，2016.
3. 天野俊康，岸蔭貴裕，今尾哲也：過活動膀胱に対するフェソテロジンの効果に関する臨床的検討 OABSS，PPBC，SF-8による前向き研究，西日本泌尿器科，78（10），503-509，2016.
4. 一般社団法人日本創傷・オストミー・失禁管理学会（2016）. 平成28年度診療報酬改定排尿自立指導料に関する手引き，2018年1月24日，  
<http://shorinsha.tameshiyo.me/9784796523813?page=3>
5. 松尾朋博：高齢自己導尿患者におけるMini-Mental State Examinationを用いた認知機能の検討，泌尿器外科，26（5），885-888，2013.
6. 仙石淳：脊髄不全損傷による下部尿路機能障害における排尿法選択とその長期予後，日本脊髄障害医学会雑誌，24（1），172-173，2011.
7. 高橋甲枝，相野さとこ，村山由起子，他：「手術直後の患者の観察」のシミュレーション演習の効果，西南女学院大学紀要，18，45-54，2014.
8. 河井伸子，川端京子：インスリン自己注射と自己血糖測定の演習を振り返って 役割演技シミュレーションを取り入れた演習の試み，大阪市立大学看護短期大学部紀要，5，11-17，2003.
9. 関美奈子：学生間のrole-playを用いた患者教育の学習効果の検討 初回インスリン自己注射導入の模擬患者を用いて，日本看護学教育学会誌，13（1），11-17，2003.
10. 杉村享之，田中順子（2018）. 自己導尿マニュアル，2018年1月24日，  
[http://www.createmedic.co.jp/files/user/general/pdf/manual\\_self.pdf#search=%27%E8%87%AA%E5%B7%B1%E5%B0%8E%E5%B0%BF%E3%83%9E%E3%83%8B%E3%83%A5%E3%82%A2%E3%83%AB%27](http://www.createmedic.co.jp/files/user/general/pdf/manual_self.pdf#search=%27%E8%87%AA%E5%B7%B1%E5%B0%8E%E5%B0%BF%E3%83%9E%E3%83%8B%E3%83%A5%E3%82%A2%E3%83%AB%27)
11. James W Drisko, Dina Maschi: Content Analysis, 81-119. Oxford University Press, New York, 2015.
12. 舟島なをみ：質的研究への挑戦第2版，51-79，医学書院，東京，2009.
13. 玉井和子：看護教育におけるシミュレーション教育の研究，佛教大学大学院紀要，43，19-34，2015.
14. 高比良祥子，片穂野邦子，吉田恵理子，他：実習前準備教育としてのシミュレーション学習における学生の学び，長野県立大学看護栄養学部紀要，12，41-52，2013.
15. 池西静江：看護実践に求められる思考力を育成する - 講義・演習で思考力を育成する教育方法 -，医療，68（2），72-75，2014.